

# 天一国物理学の宇宙論に関する研究:

## 天一国物理学、格菴遺録、現代物理学の宇宙論の比較を中心に

金振春(キム・ジンチュン)、清心神学大学院大学校総長、2009.8.29

### 序論

宇宙はどのように始まり、現在の姿はどのように形成され、宇宙の未来はどのようなものだろうか。20世紀に入り、現代物理学は、宇宙が無から誕生し、膨張していると説明する。

生命体の進化論(生物進化論)のように、宇宙の進化論(宇宙進化論?)が現代生物学と現代物理学において広く主張されている。生物進化論は、生物体がデザインや目的なしに偶然に誕生し、進化したという理論だ。宇宙進化論(?)は、宇宙もデザインや目的なしに量子力学の確率的ゆらぎ(quantum fluctuation)によって動機が付与され、自発的対称性崩壊の過程を通して無から誕生し、物理学的法則によってのみ宇宙が発展したと説明する。

本研究は、このような現代物理学の宇宙論を天一国物理学による宇宙論と比較することによって現代物理学の無神論的宇宙論を神を中心とした宇宙論に昇華発展させようとする。そのために、宇宙を宇宙と神、宇宙自体、宇宙と人間、宇宙と天一国に区分して考察する。すなわち、「宇宙と神」では宇宙の起源(I)と宇宙の存在法則(II)、「宇宙自体」では宇宙の誕生(III)と宇宙の存在の姿(IV)、「宇宙と人間」では宇宙の主体(V)、「宇宙と天一国」では宇宙の窮極目標(VI)という六つの観点から考察する。

ところで、「格菴遺録」の宇宙論が天一国物理学の観点と類似した点が多いので、現代物理学的宇宙論と共に比較考察する。「格菴遺録」とは、今から460年前に格菴南師古先生が啓示を受けて記録した秘書であり、韓国ではすでに様々な解説書が出版されている。本研究では天一国物理学と最も近い解説をしているキム・ジョンギ先生の「天心遺録」(未出版、2009年7月仮製本)を参考にする。

### 1. 宇宙論の概要

#### 1) 現代物理学の宇宙論

現代物理学に基づいた宇宙の発展史を簡略に考察すれば、1905年、Einsteinの特殊相対性理論によって時間と空間の相互関係、エネルギーと物質の相互関係が明らかになった。1916年、一般相対性理論はエネルギーと物質によって時間と空間が影響を受け、宇宙には始まりがあって膨張しているという点を予言した。

1929年、Hubbleは宇宙が膨張していることを観測により確認した。1948年、Gamowによってビックバン宇宙論が提唱され、1965年、PenziasとWilsonによって3Kの宇宙背景放射が観測されてビックバン宇宙論

は強い支持を受けることになった。1970年、HawkingとPenroseは宇宙に特異点が存在することを証明し、1981年のGuthと1982年のAlbrechtとSteinhardtおよびLindeらによってインフレーション・モデルが提唱された。1983年、HawkingとHartleによって虚数時間説が提唱され、「トンネル効果による無からの宇宙誕生」が理論化された。

1992年のCOBEと2003年のWMAP観測衛星の結果により、天体形成の種になる宇宙背景放射のゆらぎ(密度の不均一)が発見された。そして、2003年のWMAP観測結果から、ビックバン時代は、宇宙誕生から38年後に終わり、宇宙誕生から今までは $137 \pm 2$ 億年という時間がかかったことも明らかになり、現在宇宙の年齢は137億年として確定された。

1930年頃提案された暗黒物質(dark matter)は1970年、Rubinの観測で確認され、1988年、Permuterチームの観測によって反重力作用と宇宙膨張の加速を起こすダークエネルギー(dark energy)が明らかになった。現在宇宙は4%が普通の物質とエネルギー、23%が暗黒物質、73%がダークエネルギーで構成されている。すなわち、96%は普通の物質でない未知の物質とエネルギーだ。現在暗黒物質とダークエネルギーの正体が焦点の関心対象になっており、宇宙の膨張はダークエネルギーの主導によって加速されていると知られている。

## 2) 格菴遺録の宇宙論

格菴遺録で「宇宙」とは神様世界を意味する。すなわち神、人間、天体が本質世界と物質世界で一つに調和した世界だ。したがって宇宙は一般的概念の空間ではなく、物質だけの世界でもないので、物理学的数理的理論で描写したり、観察や測定したりできない世界だ。

宇宙は全有、全能、全理気による龍華三界の世界で、その中で全理気、すなわち神の心(天心)と力(原力)が最も重要だ。すなわち宇宙は天心と原力の神の心力によって維持され、運営され、統治される世界だ。そして地球は宇宙で最も理想的な世界であり、宇宙の中心に配列されている宇宙の心臓であり、宇宙の聖地だ。このような宇宙は天時により神が悟らせてくださなければ知ることはできず、ただ神の計画と御言によってのみ全て明らかにすることができる。すなわち宇宙は人間の能力だけではとうてい分からない神秘の世界だ。

だが本研究では、このような性格の宇宙を宇宙の起源、存在法則、誕生、存在の姿、主体、窮極目標などの観点に分けて考察することにより、現代物理学の宇宙論、天一国物理学の宇宙論と比較できるようになる。

## 3) 天一国物理学の宇宙論

天一国物理学は、天一国の観点から万物について物理学的に研究する学問といえる。天一国(天宙平和統一国)は、神と人間と万物が神を中心として天宙(霊界+肉界)的に平和統一を成した世界だ。このような天一国は三大祝福としてよく表現され、天一国物理学は三大祝福の中で第三祝福に関係する。すなわち、天一国物理学は万物(神と人間を除いた全ての存在)の中で物理学の対象になるエネルギー、時間、空間、物質を神との関係(万物の起源; 万物の存在法則)、万物自体(万物の生成; 万物の存在の姿)、人間と関係(万物の主体)、天一国との

関係(万物の窮極目標)等の観点から考察する。

宇宙は広い意味において、神と人間と万物が全て含まれた世界(霊的肉的世界、あるいは天宙)といえるし、狭い意味においては、神と人間と霊的世界を除いた肉的な万物世界として定義することができる。本研究では狭い意味の宇宙を使うことにする。

したがって、本研究での宇宙とは、肉的世界(自然界)におけるエネルギー、時間、空間、物質(特に素粒子、原子、天体)が一同に調和した物理学的宇宙を意味する。そうして、天一国物理学の宇宙論を天一国物理学の六つの基本テーマに基づいて、神との関係(宇宙の起源; 宇宙の存在法則)、宇宙自体(宇宙の生成; 宇宙の存在の姿)、人間との関係(宇宙の主体)、天一国との関係(宇宙の窮極目標)を考察する。

すなわち、天一国物理学の宇宙論を宇宙の起源(I)、宇宙の存在法則(II)、宇宙の生成(III)、宇宙の存在の姿(IV)、宇宙の主体(V)、宇宙の窮極目標(VI)の六つの観点から現代物理学の宇宙論、そして格菴遺録の宇宙論と比較考察する。

## 2. 宇宙論(I): 宇宙の起源

### 1) 現代物理学の立場:宇宙進化論(確率的発生、神の御旨と無関係)

#### (1) 宇宙の起源: 無からの誕生。量子力学的ゆらぎ

1973年、Tyronは*Nature*紙において「何もない状態から宇宙が誕生することができる」という主張をした。すなわち、「宇宙とは、真空のゆらぎによって、随時に誕生するその何か」だと言った。これは宇宙が「無から創造」(creatio ex nihilo)されたことを示唆している。<sup>1</sup>

現代物理学は宇宙が「無」から誕生したと説明する。「無」とは、光も、物質も、時間も、空間さえも全くない、何も存在しない状態だ。しかし、量子論では、このような「無」が量子力学的ゆらぎ(fluctuation)だとしている。事実、量子力学的ゆらぎ(fluctuation)のために完全な無はありえない。このゆらぎのために大きさが空間が大きさを持つ空間として誕生することになり、何の物質もない真空状態の空間は極微なゆらぎ(零点振動)を内包している。<sup>2</sup>

量子論によれば、粒子は様々な状態が確率的に共存し、電磁気波も多様な電磁気場の波動が共存する。ところで、いくらエネルギーや物質が全くない真空でも電磁気波の零点振動が内在していて、不確定性原理や零点振動によって、全ての存在はじっとしてられない。したがって、エネルギーや物質が全くない真空状態(無の状態)の宇宙もゆらいで、エネルギーや物質がある宇宙が生成される。すなわち、量子的ゆらぎによって宇宙が無から誕生することになり、この量子的ゆらぎのために宇宙は必ず誕生しなければならない。<sup>3</sup>

---

<sup>1</sup> M. Kaku, 『평행우주(Parallel Worlds)』, 박병철 역, (서울: 김영사, 2006), pp.162-163.

<sup>2</sup> Newton Highlight, 『우주는 무에서 태어났다』, (서울: 뉴턴코리아, 2009), p.46.

<sup>3</sup> Hight Light, op. cit., pp.28-29.

## (2) 物質の起源： 自然発生

宇宙がインフレーションを起こせば零点振動が拡大し、宇宙に無数の粒子が自然発生する。真空状態にも真空エネルギーがあって零点振動が生じるようになるのだが、この量子場は量子力学的確率によって零点振動を大きな振動で変化させる場合を発生する。零点振動で大きな振動が出現するのは粒子の出現に対応するのだが、Einstein の  $E=MC^2$  と、量子化条件によって真空エネルギーから粒子が生成される。そうして、インフレーション段階が終るときには、宇宙空間には超高温、超高密度の莫大な物質が自然発生してビックバン宇宙に発展する。ビックバン宇宙段階ではエネルギーから粒子/反粒子の双（カップル）が生じ、さらに自由クォークと電子が生成され、陽性子と中性子、そして原子核が形成される。ビックバン宇宙が終わる頃の宇宙誕生後 38 年頃には、原子が形成され、それ以後から重力と核融合反応によって重金属とホコリと天体が形成される。

## 2) 格菴遺録の立場： 神の天心と原力で運営される宇宙

### (1) 創造された宇宙、愛の宇宙

全てのものは神様世界から分化し、神の創造的調和により成された。すなわち、この存在世界は創造から始まり、宇宙の全てのものは創造の属性に含まれる。そして、宇宙は愛の気運がいっぱい満たされた世界であり、愛の気運によって運営されている。すなわち、宇宙は愛の体系になっており、愛の気運によって編まれている。

### (2) 天心と原力による宇宙

天心は宇宙の構成要素の中で最も重要で、宇宙の根源的な本質だ。また、天心は全ての存在に含まれているので、宇宙の中の全ての運動は天心の作用によって引き起こされる。天心は宇宙の全てのものを総括し、一糸不乱に宇宙を統治・支配する。宇宙を構成する全ての質料には天心が含まれているので、宇宙は天心の場だ。宇宙は天心の組織化によって配列されているので、秩序整然として運営される。天体は天心の支配を受けており、天心の意志により運動する。神は、天心によって地球、太陽、全ての星の生成と運動を総括および主宰され、全ての惑星と宇宙の全領域を天心によって運行される。

原力は宇宙自体を結束している根源的な力であり、天心は原力を支配し、宇宙を動かす。天体の構造の中に理気(天心+原力)の本質が含まれている。本質世界の中の理気と天体の中の理気が連結し、天体が運動する。

## 3) 天一国物理学の立場： 神から創造された宇宙

### (1) 神の実存と創造による宇宙万物

天一国物理学は、無形でも有形でも全ての存在には原因があり、究極的に全ての存在の第一原因があることを主張する。神の実存は神学的、哲学的、科学的に多くの論議がされてきたが、天一国物理学は存在に共通に内在する普遍的価値と対称性に注目する。真の愛を中心とした真・善・美という絶対価値が、時間と空間、人間と万物の差を越えて、普遍的に存在する。また、不変性(保存性)と関連した対称性、相対的交換性と関連した

対称性、統一性と関連した対称性が、普遍的に存在する。このような普遍性は、全ての存在が同一の第一原因から始まったためだ。これは宇宙の平坦性(flatness)、均質性(地平線、homogeneity, horizon)に基づいてビッグバン理論を提案したのと似ている。第一原因である者を神と称する。

全ての存在は神によって、創造された。『神の創造とは、要するに被造物である一つ一つの万物が時空の世界に出現することを意味する。』<sup>4</sup> すなわち、『本性相内の内的形状の型または鋳型に無限応形性をもった素材的要素を与えて、一定の具体的な形態を備えさせる作業を創造ということができるのである。』(統思、pp.37-38：日本語版(2001)、p. 33) したがって、創造は無から無ではなく、有(無形の神)から有(無形の実存体)への創造だ。

「原理講論」<sup>5</sup>は、神が創造原理、すなわち明らかな目的(創造目的)と法則(創造法則)に立脚して存在物を創造したので、存在の形成過程は決して偶然的、無目的的な進化ではないことを強調している。<sup>6</sup>すなわち、『神の創造は偶発的なものではなく、自然発生的なものではさらさない。それは抑えることのできない必然的な動機によってなされたのであり、明白な合目的的な意図によってなされたのであった。』(統思、p.74：日本語版、pp. 67-68)。

天一国物理学は、神の創造を対称性崩壊(SB)として理解する。<sup>7</sup> 創造は神が対象を探して喜ぼうという強い衝動によって起きたのだが、創造の形状的側面は物理学の対称性崩壊として理解できる。物理学的対称性崩壊なしにはいかなる存在も生成されることができず、神の創造はすなわち対称性崩壊と直結する。

神は、自身の属性と構想に似た存在を創造することにおいて、神自体内の授受作用を通して形成される授受作用力によって、自身から分立された実体対象を創る。すなわち、正分合作用で合成体(実体対象)が創られるのだが、合成体(一つの実体)が創られたということは対称性が崩壊したことを意味する。したがって、神は対称性崩壊を通して新しい存在(被造万物)を創造しているといえる。そのような点において、対称性崩壊は神の創造計画(God's intention、創造目的)により進行される一つの創造方式だ。

## (2) ISB と二段階創造による宇宙創造<sup>8</sup>

ところで、天一国物理学は、神の創造を自発的対称性崩壊(SSB)ではなく、計画的対称性崩壊(ISB)として理解する。神の創造は無計画的、偶発的な創造ではなく、具体的な創造目的と創造理想にともなう創造なので、対

<sup>4</sup> 통일사상연구원, 「통일사상요강(두익사상)」, (서울: 통일사상연구원, 1992) p.77(日本語版(2001)、p. 70). 以下、「統思」と表記。

<sup>5</sup> 세계기독교통일신령협회, 「원리강론」, (서울: 성화사, 1995). 以下、「講論」と表記。

<sup>6</sup> 例えば、「被造世界は…神の二性性相が、創造原理によって、象徴的または形象的な実体として分立された、個性真理体から構成」(講論、p. 28：日本語版(2003)、p. 48)、「原理によって被造世界を創造され」(講論、p. 108：日本語版、p. 132)、「原理によって創造された人間」(講論、p. 102：日本語版、p. 125)。

<sup>7</sup> 金振春、「対称性観点から見た統一物理学探求」(第1回国際統一思想専門分野セミナー：物理学中心、2008.9.4-6、日本 熱海; 第20回国際統一思想シンポジウム、2008.11.28-12.1、日本 東京)。

<sup>8</sup> 金振春、「対称性観点から見た統一物理学探求」参照。

称性崩壊も自発的で無計画的であり、目的性がない SSB(spontaneous SB)ではなく、意図的で計画的であり、目的的な ISB(intentional SB)だ。

現代物理学は、計画と意図なしに量子力学の確率的ゆらぎにだけ依存する SSB に土台を置いている。しかし、天一国物理学は正分合作用の過程により神の性稟（せいひん）が主導する ISB(計画的、目的対称性崩壊)を主張する。事実、SSB は、創造の形状的側面だけを説明する部分的理論だといえる。

そして、天一国物理学は、Higgs Mechanism(HM)を二段階創造<sup>9</sup>の形状的側面とみなす。現代物理学において、存在が質量を得ることによって実体化される方法は HM だけだ。力学ゲージ粒子、クォーク、レプトンが質量を持つとするならば、内部対称性が崩壊しなければならない。SSB に基盤を置いている HM を通してクォーク、レプトン、力学ゲージ粒子(W±, Z)と同じ標準母型の基本粒子は質量を持つようになる。

天一国物理学は、このような HM を含みながらもその性相的要素を共に備えている二段階創造を主張する。HM は SSB に土台を置いているが、二段階創造は ISB に土台を置いている。HM は二段階創造の形状的側面だけを説明する理論といえる。結局、天一国物理学は HM を否定せず、これを「二段階創造」に upgrade しようとする。そうして、HM は性相的要素を持つようになり、統一原理は科学的 process を活用するようになる。そのような点において、HM は創造過程の形状的側面といえる。

### (3) 神の内在性と霊肉界主管

神と被造世界(被造物)は内・外、原因・結果、主体・対象、縦・横という二性性相の関係を結んでいる(講論、p.28)。したがって、全ての被造物は二段階創造過程を通して創造されたので、創造主である神の存在と性稟が全て内包されているだけでなく、神の創造目的と創造法則のとおり存在するようになる。これはすなわち、創造主である神が被造世界全体(霊界と肉界)を自身の創造目的と創造法則のとおり主管されるという意味だ。実際、霊肉両面の世界、無形・有形実体世界を主管されようとするのが、神の人間創造目的だ(70.10.13)。<sup>10</sup>

### 4) 現代物理学、格菴遺録、天一国物理学の立場の比較

格菴遺録の立場は現代物理学の立場と大きく異なる。現代物理学は神の実存、創造、摂理などとは関係ない。しかし、格菴遺録は、宇宙が徹底して神によって創造され、神によって運営され、神の性稟が全ての存在に内包されていることを強調する。すなわち、神の心と力、すなわち天心と原力によって宇宙が創造されて運営さ

---

<sup>9</sup> 創造の第一段階は構想・設計・青写真に該当する Logos を創る段階だ。Logos は、神の創造目的を中心として内的性相(情、知、意)と内的形状(観念、概念、法則、数理性)が授受作用を通して一つに統合された合成体だ。したがって、Logos の中には神の性稟と属性が全て入っており、Logos は神の構想と計画だ。創造の第二段階は被造物自体を創る段階だ。被造物は、創造目的を中心として神の本性相(Logos)と本形状(万有原力、Pre-Energy)が授受作用をすることによって創られた合成体(新生体)であり、エネルギー、物体、世界を意味する。神は二段階過程を通して全ての被造物を創造する。(統思、pp.74、128-129：日本語版(2001)、pp. 68, 122、参照)

<sup>10</sup> 문선명선생말씀편찬위원회, TP Speech304, 말씀선집 제 305 권-432 권 (서울: 성화사, 2007). 以下、文鮮明先生が語られた年代だけを表記。例えば、「99.3.6」。

れており、全ての存在には天心と原力が内包されている。格菴遺録は宇宙を神様世界として説明する。

天一国物理学の立場は現代物理学とは大きく異なるが、格菴遺録の立場とは類似しているといえよう。天一国物理学では、現代物理学の SSB と HM を ISB と二段階創造に昇華発展させて具体的に説明しているが、格菴遺録は具体的な mechanism が不十分だ。

### 3. 宇宙論(II): 宇宙の存在法則

#### 1) 現代物理学の立場: 一般相対性理論+量子論

宇宙は現代物理学の一般相対性理論と量子論によって説明されるが、これらの理論の土台には対称性と量子化がある。力と粒子と宇宙に内在している対称性は三つに分類される: 不変性(保存性)に関連した対称性、相対的交換性に関連した対称性、統一性に関連した対称性。<sup>11</sup>

「不変性」は保存法則に関連し、古典物理学と現代物理学において問題を解決するのに大きな指針になる。自然万物は直短距離と最適状態を維持するが、これは最小作用の原理(least action principle、LAP)として説明される。LAP も不変性と関係し、LAP から Newton 方程式、Maxwell 方程式、Schrodinger 方程式、Fermat 原理などが導き出される。「相対的交換性」は、時間:空間、エネルギー:質量、粒子:反粒子、普通粒子:超対称粒子、粒子:波動、二重性(duality)等のように相対的關係で成立する対称性だ。「統一性」に関連した対称性は、例えば四つの力(強い力、弱い力、電磁気力、重力)→三つの力(強い力、弱い電磁力、重力)→二つの力(GUT 力、重力)→一つの力(Superforce、TOE 力)に統一されていくにあたって関係する対称性だ。

そして、存在が量子化されているということは、また別の重要な自然法則だ。たとえ量子化が微視世界だけで大きな影響を与えているとしても、これらは本質的な自然法則だ。宇宙誕生と初期段階は微視世界なので、量子化は重要な役割を果たすようになる。

#### 2) 格菴遺録の立場: 龍華三界の宇宙

##### (1) 龍華三界の概念と特徴

龍華三界とは、想像を超越した優雅で華麗な三つ類型で構成された世界という意味だ。このような龍華三界は「空間」という用語よりも、宇宙をよく説明している。したがって、龍華三界の法則を会得すれば宇宙が正しくわかるようになる。龍華三界は、万物生成の根本であり、万物機能の根本であり、宇宙を運営して統治する根本だ。龍華三界の全有、全能、全理気によって、天体が生成されて機能する。龍華三界の組織原理を適用してこそ天体の配列と宇宙運営の糸口を見つけることができる。天体を始めとした全ての存在が、龍華三界の三つ類型の集合で成り立った。

---

<sup>11</sup> 金振春、「対称性観点から見た統一物理学探求」参照。

## (2) 龍華三界の三類型と三体系

龍華三界は全有の世界、全能の世界、全理気の世界が一つに統合されている。ところで、龍華三界の三類型である全有、全能、全理気は別々の役割ではなく、根本質料に全て含まれ、一つの体(原体)を成す。

「全有の世界」は、宇宙を成す根本質料(粒子)が集合した世界であり、全ての万物の生成を成り立たせる有形からなる粒子世界だ。生成の粒子が龍華三界に隙間なくぎっしり満たされており、宇宙には生成の粒子が集まっている。「全能の世界」は宇宙を成す全ての質料(粒子)が特性を持ち、この特性を様々に発揮できる有形からなる粒子世界だ。「全理気の世界」は天心と原力の二つの機能を同時に遂行する根本質料の世界であり、天心の意志が直ちに原力として作用する世界だ。

そして、龍華三界は、三体系、すなわち粒子的結束体系、特性的能動体系、心力的機能体系により統一されている。龍華三界は三つ類型からなる構造が一つの塊の粒子的結束体系になっており、粒子的結束体系を成す全ての質料は多様な特性を持っているので特性的能動体系として機能する。粒子的結束体系と特性的能動体系を成す全ての質料は、天心と原力を伴った心力的機能体系によって統一的に運営されている。

## 3) 天一国物理学の立場: 創造法則によって運営される宇宙

### (1) 創造法則(存在法則)

神は抑えきれない心情の衝動により、真の愛の対象を必然的に創造するようになる。ところで、創造において、先に創造目的を立て、その創造目的を実現するためのある原則と法則、すなわち創造法則を立てるようになる。人間と万物、人間と人間、人間と神の間には厳然たる創造原理的關係が予知・予定されている(平神、11章)。

12

### (2) 真の愛と御言による宇宙

天一国物理学の土台になる創造法則のうち、一番目は真の愛の法則だ。霊界を含んだ宇宙は、全て同一の神の真の愛の原理の下で存在する(94.5.1)。神の創造役事出発の核は、真の愛の実践だ(平神、12章)。真の愛は、神の本質的性稟であり、創造出発の核であり、絶対・唯一・不変・永遠の属性を持つ。真の愛は、いかなる目的(why)、人(who)、内容(what)、方法(how)、時間(when)、場所(when)でもその属性が変わらず、例外と副産物を作らない。すなわち、いかなる種類の変換に対しても、不変(保存)という対称性を持つ。

そして、真の愛はいかなる浪費と副産物も作らない完璧な作用原理を内包し、「直短距離」と「最適状態」を維持する。これは、LAP(最小作用の原理)と関係するのだが、LAP から様々な方程式が導き出されるように、真の愛の原理から方程式が導き出されるであろう。また、真の愛の属性は、外側(全体と相手)に向かうので、エントロピー法則(熱力学第二法則)とも関連する。なぜならばエントロピー法則は、存在の無秩序状態が増加する、すなわち、系の状態がさらに混乱・拡散する方向に変化することを意味するからだ。

---

<sup>12</sup> 세계평화통일가정연합, 「평화신경」, 성화사, 2009. 以下、「平神」と表記。



創造法則の二番目は、御言創造の法則だ。二段階創造で議論したように、全ての被造物は神の御言(構想、設計)により創造され、したがって全ての被造物は御言により存在する。

### (3) 二性性相・授受作用・正分合作用・四位基台・三大祝福による宇宙

創造法則の別の側面としては二性性相、授受作用、正分合作用、四位基台、三大祝福がある。神の二性性相、授受作用、正分合作用、四位基台、三大祝福により全ての被造物が創造されたので、被造物はこのような創造法則により存在するようになる。

特に四位基台は、それ自体内に二性性相、授受作用、正分合作用が溶解しているので、統一と調和と対称性を持っている。そして四位基台は、このような対称性に対応する保存性・不変性を持つようになって永遠の創造基台と善の基台になる。すなわち、四位基台は最も包括的な構造・基台であり、調和・統一のための最も良いモデルであり、絶対価値と調和と統一のための理想的モデルだ。<sup>13</sup>

三大祝福は、神の喜びと創造理想と善を最もよく具現する。三大祝福は、人間を含む全被造世界が神を中心に四位基台を造成したときに完成される。三大祝福が実現された世界を天国といい、その世界には最高の善が具現され、神は最大の喜びを感じる。

### 4) 現代物理学、格菴遺録、天一国物理学の立場の比較

格菴遺録の観点は現代物理学の観点と大きく違う。現代物理学は、対称性(不変性、保存性、pair system)と量子化を主要な存在法則としている。しかし格菴遺録は、宇宙が龍華三界で構成されており、龍華三界で運営されていることを強調する。すなわち宇宙は、全有という存在の粒子的側面(外的)、全能という存在の特性的側面(内的)、全理気、すなわち神の心(天心)と力(原力)という神的側面により構成されていることを説明する。すなわち宇宙の存在法則は、全有、全能、全理気の統一性だといえる。

天一国物理学の観点は、現代物理学の観点(対称性、量子化)を否定せず、これを受け入れて発展させようとする。保存的対称性は神の絶対性・不変性・永遠性に、交換的対称性は神の二性性相的相互交換性に、統一的対称性は神の唯一性に、その起源がある。四位基台には、このような対称性が含まれている。量子化は、普遍性の個別化として理解できるであろう(統思、pp.54-55, 108: 日本語版、p.49)。普遍的エネルギーが量子化によって特別なエネルギー状態、あるいは物質化するの、普遍相が個別相になる過程と似ている。

格菴遺録の全有と全能は、統一原理の形状と性相の二性性相と非常に似ており、全理気は二段階創造の観点から理解しやすい。しかし、天一国物理学の宇宙は、現代物理学と格菴遺録の立場より遥かに豊富で包括的な存在法則(真の愛、御言、二性性相、授受作用、正分合作用、四位基台、三大祝福など)に基づく。

<sup>13</sup> 「四位基台は、創造目的を完成した善の根本的な基台でもあるので、神が運行されるすべての存在と、またそれらが存在するための、すべての力の根本的な基台ともなる。したがって、四位基台は、神の永遠なる創造目的となるのである。」(原理講論、pp. 34-35: 日本語版、p. 55) また、 김진춘, “사위기대를 중심한 창조목적과 창조법칙의 통일성”, 통일사상 No. 37 (1996, 가을호)、参照。

## 4. 宇宙論(III): 宇宙の生成

### 1) 現代物理学の立場: 宇宙誕生以前は不可能

『今私たちが生きている宇宙が誕生する前には何があったのだろうか。標準的な理論を土台にして答えれば、「宇宙誕生以前には何もなかった。」天体や物質がなかったということだけでなく空間自体がなかった。…空間がないので時間もない。「誕生以前」という言葉自体に意味がなくなるのだ。もちろん、私たちの宇宙は、それ以前の宇宙の一部が急激に拡大して誕生したという理論もある。…しかし「それ以前の宇宙」がどのように発生したのかは分からない。』<sup>14</sup>

相対性理論によれば宇宙は膨張し、膨張宇宙は出発点、すなわち特異点(singularity)を持つようになる。宇宙の発生の瞬間が時間の出発点(開始)であり、それ以前の宇宙は考えられない。すなわち、宇宙の起源は特異点だ。したがって、特異点以前の時間と空間とエネルギーと物質は知ることができない。すなわち、宇宙が始まった方法を把握する「原因」が存在しないのである。

### 2) 格菴遺録の立場: 先天世界(本質世界)から後天世界へ

#### (1) 先天世界の宇宙: 本質だけの世界(本質世界)

先天世界は神の本体世界であり、先に創造された世界だ。先天世界は現在の宇宙(天体を始めとした全ての物体)が生成される以前の世界であり、先天時代は現在のような宇宙を誕生するための懐胎期であった。そして、先天世界は本質(根本物質)だけで形成されていた世界であり、全ての天体と物質が生成される得る根本質料の集合体世界だ。

本質世界は母体と同じで、物質世界は母体から分化した。すなわち、本質世界は物質世界の原因であり、主体だ。言い換えれば、物質世界の根本は本質世界であり、物質は本質に由来した。結局、本質世界(虚、根源)から全ての物体(物質世界)が出現したのである。

また、先天世界は時間の基準にすることができる対象がないので、時間が適用されない。それで、先天世界は恒時、あるいは無時の世界であったのであり、無形と無対象と無時間の世界だった。すなわち、先天世界は事件がない本質世界なので、先天世界の出発時点と時を言うことができない。そして先天世界は、高い温度、過密な本質(元素)、多くのエネルギーによって造成された、光もない暗黒世界だったであろう。

#### (2) 後天世界の宇宙: 本質世界+物質世界

先天世界から始まった後天世界は現在の宇宙をいい、神の骨格が形成された神の実体ということができる。先天世界から激突を経て、後天世界が開闢し、時間が始まり、宇宙の年齢も始まった。後天世界の物質(天体)は、

---

<sup>14</sup> Hight Light, op. cit., p.45.

先天世界の本質から天心の調節的激突によって生成された。すなわち、先天世界から宇宙の全領域が天心によって引き起こされた激突の生みの苦しみを経て、天体が生成された。

そして、宇宙の天体は誕生過程を経て誕生した後、本質世界に統合されることによって現在のような宇宙になった。物質世界が天気度数によって成長過程を経て完成されれば、両百世界は先天の理想的な仕組みに還元される。今日の宇宙は長い期間にわたって成長し、進歩した。そして天体は、生まれた後から宇宙運行の度数により成長し、宇宙の中心を軸に運営されている。

### 3) 天一国物理学の立場: 霊界から始まった宇宙

#### (1) 霊界から始まった宇宙(肉界)

ユ・クァンジン(尹寛鎭)は聖書に基づいて、天地万物が創造される前にも神は存在して活動したが、まだ光がない原始暗黒の原始空間において神は永遠に独りでおられたと主張する。この原始空間は、神と共に存在する霊的な空間であり(出エジプト記 3 章 14 節)、創造されなかった空間だ。神はこの原始空間におられ、天地万物の創造を計画され、一日目から六日目まで順を追って創造されたと彼は説明する。創世記 1 章 1 節の『初めに、神は天地を創造された』において、「天」は霊的な世界を意味し、「地」は物質的な世界を意味するというのである。ところで神は、天の世界(霊界)を先に創造され、続いて地の世界(肉界)を創造されたという。霊的世界(霊界)は霊的エネルギーで包まれている世界で、霊人たちと天使たちのような霊的存在が留まる世界であると説明する。<sup>15</sup>

このような説明は格菴遺録の立場と似ている。ところで天一国物理学の宇宙論も、霊界から肉界(宇宙)が始まったということを支持する。統一原理によれば、神は霊界を先に創造した(講論、p.396)。すなわち無形世界の霊界は、人間創造以前にすでに創造された(講論、p.184)。<sup>16</sup> すなわち神は、先に霊界を創造された後に肉界を創造された。もちろん霊界は、肉界の時空間・エネルギー・物質とは違った世界であり、肉界のような時間概念によって説明できない。

#### (2) 万有原力(霊界の力、霊的エネルギー)から始まった授受作用力(肉界の力、肉的エネルギー)

現代物理学は重力、電磁気力、強い力、弱い力の四つの力が一つの力から始まったと説明する。すなわち、宇宙の初期状態に遡れば、これら四つの力は結局、一つの統一された力になる。統一原理は、このように統一された一つの力(肉界の根源的力)が神を存在させる万有原力(霊界に存在する力)から始まったと説明する。すな

---

<sup>15</sup> 유광진, 지식의 한계, (성남: 사랑하는 사람들, 2007), pp.173-180.

<sup>16</sup> 「神が霊界を先に創造されたように、そのような形の霊的世界を、先に復帰していかれるのであるから、我々墮落人間はまだ、霊的にのみしか、神の対象として立つことができないのである。」(講論、p. 396 : 日本語版、p. 431) 「人間が創造される前に、創造目的を完成した人間たちが、地上で生活したのち、肉身を脱いだ霊人体が行って、永遠に生きる所として創造されているということを知らなければならない。」(講論、p. 184 : 日本語版、p. 211)

わち、万有原力は肉界の創造以前から存在した力だ。<sup>17</sup>

万有原力は、神が時間と空間を超越して永遠に自存されるための根本的な力だ(講論、p.30)。そして万有原力は、永遠に自存する絶対的な力であり、被造物が存在するための全ての力を発生させる力の根本だ(講論、p.30)。したがって、万有原力(創造主・第一原因者である神が時間と空間を超越して永遠に自存するための力；統一思想と格菴遺録の原力に該当)から被造物・被造世界(霊的、肉的)が存在するための全ての力(授受作用力)が発生する。ところで、霊界は肉界が創造される前にすでにあつたので、力とエネルギーの生成関係は万有原力→霊的授受作用力(霊的エネルギー)→肉的授受作用力(肉的エネルギー)となる。

すなわち、霊的エネルギー<sup>18</sup>から肉的エネルギーが生成され、霊的物質(霊的エネルギー ⇨ 霊的物質)から肉的物質(肉的エネルギー ⇨ 肉的物質)が生成された。したがって、肉的エネルギーの現代物理学の四つの力(重力、電磁気力、強い力、弱い力)は、霊的エネルギーから始まり、さらに神の万有原力から始まったのである。肉界においてエネルギーから時間、空間、物質が形成されて相互関係を持っているように(肉的エネルギー ⇨ 肉的時間 ⇨ 肉的空間 ⇨ 肉的物質)、霊界でも万有原力から始まった霊的エネルギーから霊的な時間、空間、物質が形成されて相互関係を持っているであろう。しかし、霊人体と肉身、そして霊体と肉体の構成要素と作用方式が違うように、その方式(霊的エネルギー ⇨ 霊的時間 ⇨ 霊的空間 ⇨ 霊的物質)は違い得る。

神は、特性である自存(エネルギー的)、永遠(時間的)、無限(空間的)、無形(物質的特性)等は、肉界のエネルギー・時間・空間・物質の特性よりは、霊界のエネルギー・時間・空間・物質(宇宙では IV で議論)と似ている。これは、神が霊界を創造する前の存在の姿が霊界と似ており、霊界は肉界より先に創造されたことを示唆する。万有原力(神を存在させる力)と霊的エネルギー(霊的被造物を存在させる力)の相違点、神の存在空間(霊界創造以前の空間)と霊界(被造された空間)の相違点は今後の研究課題だ。

---

<sup>17</sup> 「統一思想」では、万有原力を原力として、授受作用力を万有原力として説明する。神の形状(本形状)は無限応形性(内的)と質料的要素(前エネルギー、外的)によって構成されるので(統思、p. 37：日本語版、p. 32)、本形状は「無限応形性をもった前エネルギー」といえる(統思、p. 135：日本語版、p. 128)。すなわち、本形状を科学的用語で表現すれば、エネルギーの前段階、すなわち「前エネルギー」(pre-energy)と表現できる(統思、p. 38：日本語版、p. 33)。そして、「質料的要素」は、物質の根本原因でありながら、科学の対象の限界をはるかに越える(統思、p. 134：日本語版、p. 127)。本形状(前エネルギー、pre-energy)は本性相と授受作用して「原力」(prime force)を形成する。この原力が万物を通して作用力として現れるとき、この作用力を「万有原力」(universal prime force)と呼ぶ。(統思、pp. 38-39, 63-64：日本語版、pp. 33-34, 57-58) したがって厳格に見れば、原力(prime force)は前エネルギー(pre-energy)と同一ではない。すなわち、原力は本形状自体ではなく、本性相の心情衝動力と本形状の前エネルギーが合成されたものである。あたかも、本性相の理性(内的性相)と法則(内的形状)が合わさって理法(logos、新生体)を形成したのと同じだ(統思、pp. 66-67, 122：日本語版、pp. 60-61, 115)。しかし、理法が神の本性相で形成されたので、創造過程で本性相として作用するように(統思、p. 133：日本語版、p. 126)、原力も神の本形状に該当するといえる。

<sup>18</sup> 肉的エネルギー(あるいは霊界エネルギー)には物理的、化学的、生物学的エネルギーなどがあるだろうし、心理的エネルギーは肉的エネルギーに比べて性相的側面であるといえる。肉的エネルギーは肉的五感や肉的五感と関連した観察・測定設備で確認することができる。しかし、霊的エネルギーは肉的五感では感知されず、霊的五感や霊的五感と関連した特別な観察・測定設備で確認できるであろう。最近たくさん発生している多様な霊的現象・体験により、霊的エネルギーの実存が確認できる。これと類似の議論は、유광진, 「지식의 한계」, op. cit., pp.236-242、参照。

#### 4) 現代物理学、格菴遺録、天一国物理学の立場の比較

現代物理学における宇宙(肉界)は霊界と関係がなく、宇宙自体でその出発点と起源を持つ。しかし、現代物理学とは違い格菴遺録は、霊界だけの世界(本質世界)の先天世界が先にあり、後に物質世界が本質世界から激発過程を通して生成(天心によって創造)されたという。そうして、本質世界と物質世界が共に共存する後天世界が形成され、それが私たちの宇宙であるという。格菴遺録のこのような観点は天一国物理学と似ている。天一国物理学は、もう少し細かく霊界から肉界が生成されることを説明している。

### 5. 宇宙論(IV)： 宇宙の存在の姿

#### 1) 現代物理学の立場： 霊界存在無視。肉界(宇宙)だけ考慮

現代物理学は、物理的なエネルギーと時間と空間と物質だけを議論する。すなわち霊的世界(霊界)は、物理学的研究対象とされない。これは宇宙論(IV)で考察した通り、宇宙発生の瞬間が宇宙時間の始まりであり、全てのものの起源であるので、それより過去のことはないと説明するのと一脈相通じる。すなわち、それより過去には時間も宇宙自体も存在せず、どのように宇宙が始まったのか原因を知ることもできないという。したがって現代物理学は、霊界を無視して肉界だけを考慮する。

#### 2) 格菴遺録の立場： 両白(本質世界+物質世界)の宇宙

格菴遺録は両白、すなわち本質世界と物質世界が共に調和している宇宙を述べる。すなわち宇宙は、本質世界(無形、内面世界； 霊界)と物質世界(有形、外形世界； 肉界)で構成されている。天は本質世界(龍華三界)を意味し、地は物質世界(地球、太陽などの天体の宇宙質量の 4%)を意味する。そして物質世界は、無形の本質世界によって運営される。

本質世界と物質世界は分立されていて、境界がある。すなわち世界は、必ず本質世界と物質世界に分けて考えなければならない。本質世界は原力が支配する世界であり、物質世界は造成功力が支配する世界だ。本質世界の原力と物質世界の造成功力が調節される支点がある。本質世界と物質世界の境界は天心の調節から成り、その境界で原力と造成功力が相互作用する。物質世界とは違い、本質世界はどんな先端装備を動員しても確実に把握することはできない。

本質世界が宇宙の基本土台であり、根本質料の世界であり、宇宙を動かす実質的な神の世界だ。音と匂いと形状がなく、何もないかのようになっている本質世界が主体だ。地球や太陽を成す物質は、宇宙に広く行き渡っている根本物質(本質)から形成されている。

#### 3) 天一国物理学の立場： 霊界と統一調和を成す宇宙

### (1) 霊界と肉界の創造。霊界の実存

神は、無形(霊界)と有形(肉界)の二つの実体世界を創造された。霊界は厳格に存在し、妄想の世界でもなく、想像の世界でもない(平神、3章、8章、9章、1章、12章)。霊界は、霊的五官によって有形世界と同じように実感できる実在世界であり(講論、pp.40-41,62)、永遠で不変だ(平神、3章、8章、9章、10章、12章)。

### (2) 霊界と肉界の相互関係および統一

霊界は肉界に対して主体であり、プラスの立場だ(平神、14章)。すなわち無形世界は主体の世界であり、有形世界は対象の世界として無形世界の影のようだ(講論、p.63)。神を中心とした霊界が主体だ(98.4.27)。

このような霊界と肉界は別個の二つの世界ではなく、一つの世界に連結している(86.2.9)。霊界は肉界のためにあり、肉界は霊界のためにある(82.4.11)。神は、人間を通して霊界と地上が連結されるので、霊界と地上を連結させる目的によっても人間を創った(78.8.1)。霊界と肉界は真の愛で一体を成し、一つにならなければならない(91.3.9)。霊界と肉界は内と外、主体と対象の立場であるが、二つの世界が一つにならなければならない(98.9.8)。

### (3) 霊界の時間、空間、物質、エネルギー

統一原理は霊界における時間、空間、物質、エネルギーの特性について説明している。すなわち、霊的時間、霊的空間、霊的物質、霊的エネルギーは、肉界における時間、空間、物質、エネルギーと大きな差があることが分かる。したがって、既存の数学と物理学では記述しにくく、既存の観察と測定と実験によっては検証しにくい。

一番目に、霊界は時間を超越する世界だ。霊界では愛の一体圏、神の相對圏に立つようになれば何でもでき、何億万年の歳月も一瞬にして超越できる(94.3.27)。霊界は、時間と空間を超越するので数億年前にいた人が今でもおり、その人といくらでも会え、その人々も自分が望む年齢で現れる(89.10.17)。広大な霊界は、時間と空間を超越しているので1秒間に何億万里を歩くことができ、千年前が見え、数万年前が見える(90.11.24)。霊界では1年、2年、一日というものがない(88.5.13)。霊界は、朝ならば永遠に朝であり、日と年の概念がない(88.4.17)。

二番目に、霊界は空間を超越する世界だ。霊界は広大無辺の世界だ(90.10.3)。しかし神の本然的愛の力は太陽光より何千倍も速いので、誰かに会いたくなれば何億万里、何百万里離れているとしてもすぐに現れる。太陽光よりもっと速いのが霊力であるので、霊界は一瞬にして億万里でも行ける(90.10.3)。霊界は愛の力で億千里を一瞬で往来することができ(90.12.23)、霊界は数百光年の世界を一瞬で行ったり来たりする(90.2.16)。愛の速度は光より何千倍も速いので億千里でもすぐに行くことができ、膨大な霊界を一瞬で活動することができる(98.8.9)。霊界において霊人体は稲妻より速い(99.1.16)。

霊界は距離と時間を超越し、何でも見たいと考えるだけですぐに現れ、膨大な天国のどこでも通話が可能なのと同じだ(97.4.8)。霊界では神の愛で物質世界に思いのままに通じることができ、水の中にも行くことができ、

地を垂直に通じることができ、星が無数に多い宇宙も道が全て開かれる(98.8.9)。霊界に行けば通じないところがない(89.10.17)。霊界は太陽光のような光が夜や昼でも流れる所であるのでいつも昼間だ(00.2.9)。

三番目に、霊界は物質とエネルギーを超越した世界だ。霊界で愛の理想さえ持てば何でもすぐ出て来て、「一万人の食堂と食卓を準備！」と言えば直ちに準備される(86.1.5)。霊界では愛で多様な感応圏を創ることができるので、曇りと霧にしたければそのようにすることができる(90.3.11)。霊界では自身の心霊状態のとおり、望む全てのものが可能なので、食べる心配、生きる心配、着る心配がない(89.10.15)。霊界ではいつでも必要なものは、全て供給を受けるようになっている(87.6.14)。

霊界では真の愛を中心としてあらゆる種類のものをどんなものでも創ることができる(91.6.2)。霊界では愛する人に会いたければすぐ現れ、一瞬にして数万、数十万のバンケット・ルームを造ることもできる(92.2.10)。霊界で百万人の宴をしようとするならば、思いと同時に百万人が広場に現れて全ての準備が可能なので、百万人の宴を一瞬ですることができる(86.3.2)。

霊界は、手振りさえすれば元素に戻っていく世界だ(90.7.8)。霊界ではご飯を食べ残せば、零に帰すことができる(87.6.14)。霊界では食べ残したものは原形へ、元の状態の元素に戻るのだから便利だ(92.2.10)。霊界では食べ残した物に「帰れ！」と言えば元素に戻る(90.2.5)。霊界では食べ残した物に手振りさえすれば元素に戻るのだからごみ箱が必要ない(90.12.30)。霊界でも小便・大便をするが即時に元素に戻る(91.1.1)。

#### 4) 現代物理学、格菴遺録、天一国物理学の立場の比較

格菴遺録は現代物理学とは違い、両白、すなわち本質世界と物質世界が共に調和している宇宙を説明する。これは天一国物理学の立場と非常に似ている。しかし、霊界の時間、空間、物質、エネルギー、霊人たち、天使たちについて統一原理は具体的に説明している。そして、霊界と肉界は和合統一されているので、今後霊界に対してさらに発達した科学として理解するときに来ることを統一原理は予測している。心霊科学が発達することにより、霊的な全ての現象を科学的に分析して証明できる時代に入ってきている(70.12.22)。

## 6. 宇宙論(V): 宇宙の主体

### 1) 現代物理学の立場: 人類学的原理(AP)は論議段階

#### (1) 人類学的原理 (Anthropic Principle, AP)

人類学的原理は自然の全ての常数が知的生命体の誕生と生存に適合した値に合わされているという原理だ。すなわち、各種の物理常数(重力の Newton 常数、光の速度、Planck 常数、…)の値が偶然に与えられたのではなく、ある計画とデザインにより微細に調整され、調節されたというのである。

これに対しては多くの賛否両論がある。一部の科学者たちはこれが創造主の存在の証拠であると主張するが、他の科学者たちは多元宇宙(multiverse, parallel universe)の証拠であると主張する。

ノーベル賞受賞者の Weinberg は『AP は迷信に近い神話だ』と主張し、inflation 宇宙論の先駆者の Guth も

『私は AP を叫ぶ人々を信じない。そのような話にもならない原理で宇宙の歴史を説明するのは本当に愚かなことだ』とけなした。<sup>19</sup>

反面、ノーベル賞受賞者の Wigner は『観測者の意識を導入しなければ、量子力学法則を一貫した論理で表現できない。…外部世界を探求するならば、究極的真理は「意識」に含まれているという結論を下すほかはない』とした。Hawking も『Big Bang 以後、宇宙の膨張速度が今より 10<sup>-11</sup> でも遅かったとすれば、宇宙は今の大きさに達する前に収縮しただろう。… Big Bang で誕生した宇宙が今と同じ姿に進化する確率はほとんど 0 に近い。なので私は、ある絶対者の育みがあったと考える』と言った。<sup>20</sup>

Page は、AP を四段階 (WAP→SWAP→SAP→FAP)として説明している。WAP(weak AP)は宇宙が観測されようとするなら観測の主体の「私たち」が必ず存在するべきで、SWAP(strong weak AP)は数多くの多元宇宙の中の少なくとも一ヶ所には生命体が繁栄していることを意味する。SAP(strong AP)は宇宙が少なくともある時期、生命体に適切な環境を持っているべきであり、FAP(final AP)は宇宙には知的生命体が必ず存在し、それらは決して消えないと定義する。<sup>21</sup>

## (2) 宇宙の微妙な初期条件： 常数の微細調整

宇宙は誕生の瞬間に多くの「初期条件」が決まり、誕生直後にもいくつかの初期条件が確率的に定められた。初期条件は、力の種類や大きさ、素粒子の質量や電荷、宇宙に含まれる物質の量などだ。これらの初期条件は恒星や生命を育てるのに非常に適切な値であり、奇跡というほどの絶妙の調整といえる。<sup>22</sup>

WMAP によれば、誕生後 38 万年になった宇宙の温度分布(温度分布は物質分布に対応)にも 1/10000 程度の温度のゆらぎ(不均一)があったし、これが私たちの宇宙の天体が生成される種になった。万一、物質密度の濃淡(不均一)がとても小さかったとすれば種の役割をすることができずに天体が生成されなかったであろうし、100 倍程度大きかったとすれば物質は重力によって急速に集まってブラックホールだらけの宇宙になっただろう。したがって、その当時宇宙の物質分布は現在の宇宙の状態と地球の生命体誕生に微妙に調整されていた。<sup>23</sup>

宇宙誕生後 3 分間で、ビッグバン段階は、粒子/反粒子時代→クォーク/電子時代→陽性子/中性子/電子時代→原子核/電子時代と発展した。万一、陽性子と中性子を結合する強い力(strong force)が私たちの宇宙より 10%程度弱かったとすれば、それらは重水素核を作れないようになり、ヘリウムも合成されない。結局、3 分後にも水素原子核だけ存在することになり、星の内部で核融合が起きなくなり、したがって重い元素も合成されず、生命体が創られ得ない。<sup>24</sup>

---

<sup>19</sup> M. Kaku, op. cit., p.389.

<sup>20</sup> Ibid., p.524.

<sup>21</sup> Ibid., p.387.

<sup>22</sup> High Light, op. cit., p.129.

<sup>23</sup> Ibid., p.132.

<sup>24</sup> Ibid., p.140.



## 2) 格菴遺録の立場: 人間完成があってこそ完成される宇宙

### (1) 人間の特別な位相

神は、自身の世界において人間だけを自身と似た機能の存在として創造した。人間は神様世界の最も重要な要素であり、宇宙の中で最も貴い存在だ。また、人間は、宇宙の全ての存在の中で、宇宙の核心要素として創られた存在だ。人間は、宇宙で最も精粹で精巧な本質によって成立した存在だ。したがって、人間は、有形世界で最も神秘的な存在であり、万物の霊長だ。人間は、宇宙で唯一、二重構造(霊体+肉体)に創造された。

### (2) 人間完成による宇宙完成

宇宙完成は人間完成と密接な関係を結んでおり、人間完成が先になされてこそ宇宙完成になる。人間が神様世界といかなる関係で存在して機能するかを知ることは、宇宙を探求するための優先課題だ。人間は、まず自身を知ってこそ宇宙との関係も定立され、宇宙における自身の位置も明らかになる。理想世界は天火世だ。天火世とは、宇宙の中の全ての存在が天心の支配によって統治される天心の世の中だ。人間さえ天心によって進歩して天理に従って生きるようになれば、宇宙は天火世となる。

人間が宇宙秩序を知れば誰でも宇宙秩序に従うようになるのだが、これが人間の本質化だ。人間が神と共にあれば人間が完成され、人間が完成されれば神様世界が完成される。人間が天心を理解して天心に従うことにより、人間完成が成され、さらに宇宙が完成される。天真理に従えば神の理想が人間の理想になり、宇宙の全領域に天道が回復する。

人間が天心に所属していることが分かれば、神と人間が一つになり、人間完成が成され、宇宙と人間の関係が定立され、宇宙完成が成される。天心と人心が合致すれば宇宙の葛藤の気運がなくなるので正易が成されるが、これが宇宙完成だ。人心が天心に昇華されれば宇宙に逆天的跛行(はこう)が根絶され、天心の世の中、すなわち宇宙完成になる。天心が世界の全てのことを決めるので、人心が天心化されれば宇宙の全てのことを理解することができる。人心は宇宙を構成する核心要素として宇宙完成と関連するので、人心が完成されてこそ宇宙が完成される。

## 3) 天一国物理学の立場: 人間の対象である宇宙

### (1) 宇宙の中心、主管者、媒介体、総合実体相である人間

神は人間を宇宙万象の中心として創造した(平神、2章)。人間は被造世界の中心として創造されたので、神と人間が合成一体化した場がまさに宇宙の中心だ(講論、p.40)。万物の中心は低級なものからより高級なものに連結され、最終的中心は人間だ(講論、p.39)。宇宙は人間のためにあり、宇宙の中心は人間だ(講論、p.39)。被造世界は、完成した人間一人の構造を典型として創造された(講論、p.397)。

人間は、肉身と霊人体で構成されており、それぞれ有形世界と無形世界を主管することができる(講論、p.63)。

人間は、宇宙の和動の中心として創造され(講論、p.41)、被造世界の媒介体であり、和動の中心体だ(講論、pp.64, 230)。神が人間を創造した目的は、霊界と地上界を連結するためであった(平神、2章)。

人間は万物世界を総合した実体相だ(講論、p.47)。すなわち、神は霊人体と肉身の実体的展開として無形世界と有形世界を創造したので、人間の霊人体と肉身は無形世界と有形世界を総合した実体相だ(講論、pp.40,41,64)。神は、人間が有形・無形の二つの世界を主管するように、肉身と霊人体の二つ部分によって人間を創造した(講論、pp.458, 540)。

## (2) 人間完成による宇宙完成

宇宙完成は第三祝福完成により成される。第三祝福は第一祝福と第二祝福の土台の上で可能だ。人間が神の子女として個性完成してこそ万物主管の上に立つことになり(平神、10章; 講論、p.108)、創造目的を完成した人間は全被造世界(霊界、自然界)の主管者となる(講論、p.225)。すなわち、人間が霊肉(霊人体、肉身)共に完成すれば、無形(霊界)・有形(肉界)の二つの世界を主管するようになる(講論、p.541)。人間は、完成されることによつてのみ万物を主管できる資格を得、万物を主管することができる(講論、p.108)。このような内容は、人間が完成されてこそ宇宙の真の主管者になるので宇宙を完成させる可能性があるということを説明する。

創造目的を完成した人間は、被造世界を総合した実体相であり、被造世界の和動の中心だ(講論、p.230)。創造目的を完成した人間は、宇宙を総合した実体相になるので、小宇宙という(講論、pp.225,226)。創造目的を完成した人間は、宇宙的価値の存在であり、宇宙の存在価値を完成させる(講論、pp.226, 227)。『創造理想の世界は人格を完成した人々によつて、神の愛中心の価値観が実現された世界だ』(統思、p.7: 日本語版、p.7)。結局、人間が完成されてこそ人間は宇宙実体相(小宇宙)になることによつて宇宙の価値を完成し、神の愛を中心とした世界を実現できる。

## 4) 現代物理学、格菴遺録、天一国物理学の立場の比較

現代物理学とは違って格菴遺録は、人間完成が宇宙完成のための前提条件になることを強調する。これは、人間が宇宙で最も貴い核心構成員であり、人間だけが二重構造になった最も神秘的な存在であるとみなすからだ。このような観点は、現代物理学では認められていない。

天一国物理学の立場は、格菴遺録の立場と同じ脈絡ではあるが、もっと具体的だ。天一国物理学は、現代物理学の人類学的原理(AP)を第三祝福に発展させる。APは宇宙常数と宇宙の構造を生命体の存在に必要な条件に連結させようとするが、APは第三祝福によつて完全に説明され得る。第三祝福は、神を中心として人間は主体の立場(主管者、宇宙総合実体相、形状的個性真主体)、万物は対象の立場(象徴的個性真主体)で愛と美をよく授けて受けて統一と調和と共鳴を成す理想的モデルだからだ。

要するに、天一国物理学はAPを否定せず、これを一次元格上げし、神を中心とした第三祝福(存在の本質的、究極的關係)に連結させようとする。これは、科学と宗教の出会いであり、神学と物理学の出会いであり、内的真理と外的真理を統一された一つの課題として扱うのである。

## 7. 宇宙論(VI): 宇宙の窮極目標

### 1) 現代物理学の立場: 宇宙は理想世界と無関係

現代物理学は価値(存在目的)よりは法則(存在法則)にのみ関心があるので、「理想世界のための宇宙」という概念がほとんどない。理想世界とは、喜びと幸福、真善美のような価値と関連しているからだ。

### 2) 格菴遺録の立場: 天下文明に向かう宇宙

#### (1) 天下文明での人間生活

宇宙論が出現すれば、宇宙と人間の関係、神と人間の関係、人間と人間の関係で愛と和合を成すことができな  
い全ての悪条件が解決され、地球村の全域と全人類に理想世界が到来する。人類は宇宙の法則に従って生きる  
ようになっており、天法則に従って生きれば全人類が豊かな生活をするようになる。宇宙の運営法則に従って  
人間が生活すれば、浪費がなく、豊かな世の中を生きることになり、相克要因が発生しない。宇宙が完成され  
れば、この世は相克ではなく、共生の関係が成り立つようになる。

#### (2) 完成宇宙での天体

後天世界が完成されれば、宇宙は正易になり、地球は昼夜なしに光明の世界となる。正易になれば、寒くも暑  
くもなく、暖かい春のような季節になる。正易になれば、昼と夜を識別できず、太陽と月が変数なしに恒時を  
成し、月は歪むことなく照らし、先天時代の恒時のような世の中が回復される。

宇宙が完成されれば、神は非常に安定した法則によって神様世界を統治するので、地震、津波、暴風、洪水、  
各種慢性的な病気などがなくなる。天道が人道化すれば、世の中が安定的理想世界になるので、全ての川の水  
と山川草木が天の安定的秩序に従って確立する。すなわち、宇宙が完成されれば宇宙の中の全ての秩序が安定的  
に運営される。

### 3) 天一国物理学の立場: 天一国に向かう宇宙

天一国は、神と人間と万物が創造目的と創造法則を中心として霊界と肉界で成した天宙平和統一理想世界だ。  
すなわち、神を正とし、人間(分: 主体)と万物(分: 対象)が二性相と授受作用をし、天宙平和理想世界(合性  
体)が成される。ここで「万物」は、神と人間を除いた全ての存在を意味するのだが、エネルギー、時間、空  
間、物質(string、素粒子、原子、分子、植物、動物、天体、天使など)がある。

したがって、天一国物理学の宇宙はこのような天一国の観点からエネルギー、時間、空間、string/素粒子/天  
体が神を中心として人間を主体でし、天宙平和理想世界を成すことにその存在目的がある。すなわち、天一国  
物理学の宇宙は、天一国、すなわち創造理想世界の具現という明らかな目標を成し遂げなければならない。そ

のような点において、天一国物理学の宇宙論は、真の方向性と究極的目標を持って発展しなければならない。人間が自然と共鳴圏を成して生きるとき、創造本性を中心として神・人間・万物が調和して生きる創造本然のエデンの園になる(平神、4章、5章)。

#### 4) 現代物理学、格菴遺録、天一国物理学の立場の比較

格菴遺録の立場は、現代物理学と比べて、明らかな宇宙の目標と方向性を持っている。特に、天下文明が成されて完成された宇宙(正易)の姿を描写したことは独特だ。天一国物理学の立場において、第一祝福と第二祝福を成した人間(主体の立場)は、宇宙(対象の立場)を内的外的主管をし、宇宙の創造本然的価値を全て実現する第三祝福(宇宙完成)を完成しなければならない。結局、宇宙完成は三大祝福完成を成すようになり、三大祝福の地上天上天国、すなわち天一国を具現するようになる。そのような点において、天一国物理学の観点は現代物理学と格菴遺録の立場より具体的、体系的、包括的な立場で明らかな目標を指向するといえる。

#### 結論

今まで論じたことを要約してみれば、現代物理学の宇宙論は、格菴遺録の宇宙論を経て、天一国物理学の宇宙論へ向かっていることがわかる。すなわち、無神論的宇宙論が有神論的宇宙論を経て、より徹底して具体的であり包括的な有神論的宇宙論に発展するといえる。

現代物理学は、肉界の宇宙だけを研究対象にするので、神と霊界を扱わない。したがって、現代物理学の宇宙論において、宇宙は、①神の実存と創造を否定し、②相対性理論と量子論に基づき、③物質世界(肉界)の起源を否定し、④物質世界(肉界)だけを考慮し、⑤人間とあまり関係なく(APは論議中)、⑥理想世界実現とあまり関係ない。

しかし、格菴遺録の宇宙論において、宇宙は、①神の被造物であり、②龍華三界の世界であり、③本質世界から物質世界が生成され(先天→後天)、④両白の世界であり、⑤人間の対象であり、⑥天下文明を指向する。反面、天一国物理学の宇宙論は、現代物理学の宇宙論と格菴遺録の宇宙論を全て内包し、より根本的であり、包括的に説明する。これは統一原理が持っている根源的、本質的、包括的、体系的内容に基づくからだ。

文鮮明先生は、宗教と科学の統一を強調する：『今まで科学が外的な世界の知識を発展させてきて、宗教が内的な世界の知識を発展させましたが、これが分かれているということです。これが一つになるためには科学者も宗教を知らなければならず、宗教家も科学を知らなければなりません。』(79.3.25)。

いまや神の摂理は、創造本然の世界である後天時代を開いていく暁時代、すなわち後天開闢時代を迎えた。内的真理と外的真理が一つに統一されており、霊界と肉界が統一されており、人間と万物が神を中心として創造本然的理想世界の天一国を創り出している。

文鮮明先生によって宣布された成約の御言(神の天秘)を中心として天一国の門が開かれている。神の摂理により、神と人間と万物が、霊界と肉界で共に調和し、統一と調和を成している宇宙を正しく理解するときが到来した。これは神の創造理想世界の天一国の観点から宇宙が新しく理解されることを意味する。まだ天一国物理

学自体は体系化されなければならない課題が多い。しかし、本研究が宇宙平和神文明の後天時代を指向し、天  
一国(宇宙平和統一国、地上天上天国)建設に少しでも寄与できることを願う。